

● 朝のこない夜はない ●

なにごと  
何事も

しょうけんめい  
一生懸命やりましょう

山首 鈴木正修



ウコンの花

## 一生懸命

—— 余分なことを考えずに一生懸命 ——

「わび茶」の大成者であり、豊臣秀吉に仕えた茶道三千家の始祖・千利休が、ある茶会に行った時のお話です。利休を招待した人が亭主となってお茶をたてましたが、亭主は緊張のあまり茶杓でお茶を取る際に震えて、こぼしこぼしやっていたそうです。出席者はみな、口を押さえながら笑ったといいます。ところが、亭主が何とかお茶をたてて出すと利休はそれを

飲み、「あっぱれな点前であった」と言ったそうです。

昔からお茶の世界では「慣れなければならぬが、慣れてはならない」と言われています。慣れなければならぬとは、熟練しなさいということです。慣れてはならないとは、惰性に陥ってはいけない、震えながらの、初心の心を忘れないようにせよ、ということなのです。

お茶の世界ではまた「生まれて初めて

点前てまえに立ち向むかった時の初しよ心を忘わすれないように。初はじめてたてた一服ぶくも生涯しよがでたった一度ど。二服ふくめもたった一度ど。過ぎ去さつた時の流ながれが再びふた戻もどつてこない以上いじやう、どの瞬間しゆんかんもどの所作しよさも生涯しよがたった一度どであることを忘わすれず、慎つしんで立ち向むかいなさい」と言いわれます。つまり「一期一会いちご一会」の精神せいしんです。

青山俊董あおやましゆんどうという禅宗ぜんしゆうの尼僧にそうさんが、あるお寺てらに出向でむかれた時のことときです。ご法ほう話わの前に全員ぜんいんがご住職じゆしやくの唱導しやうどうで「仏法聴聞ぶつぽうちやうもんの心得こころえ」を讀よまれたそうです。

「一つ、このたびのご縁えんは今生初こんじやうはじめてのご縁えんと思おもうべし。一つ、このたびのご縁えんは私一人わたくしひとりのためのご縁えんと思おもうべし。一つ、このたびのご縁えんは今生最後こんじやうさいごのご縁えんと思おもうべし」

法尼ほうにはこれを聞きき、すばらしいとすぐまにメモをされたそうです。

「今生初こんじやうはじめてのご縁えん」とは、何回なんかいも聞きている話はなであつても、いつも初はじめて聞きく話はなだと思おもつて聞きかなければならぬといふことことです。

沢木興道さわきこうどうという禅宗ぜんしゆうの高僧こうそうも「大事だいじなことは耳鳴みみなりがするほど聞ききなさい」と

言いっています。どんなお話はなしも初はじめて聞きくつもりで聞きくと、そこにはその時とき々の悟やうていりがあるものです。

また「私わたくし一人のご縁えん」とは、私わたくしのために話はなしてくださっていると思おもわなければいけないという事です。

そして「今生こんじょう最後さいごのご縁えん」とは、また聞きけると思おもってはいけない。次つぎはないという氣きで聞ききなさいということです。

ご法話ほうわをするにあたつても、慣なれてくるとよくありません。また、上うま手まくやろう、ほめてもらおうと思おもうと雑念ざつねんが入はいってよくありません。「今生こんじょう一回かい」と思おもつ

て一生しやうけん懸命けんめいにすることが大切たいせつです。

ある信教師しんきょうしさんが報恩講習会ほうおんこうしゅうかいで話はなをされた時とき、「非常ひじょうに緊張きんちやうした」と言いわれました。

「家族かぞくや知しり合あいも聞ききに來きていたので、時計とけいも見みられないくらい緊張きんちやうしたけれど、一生しやうけん懸命けんめい話はなしをしていたらちようどその時間じかんに終おえられてホツとした」と言いわれました。私わたくしはその方かたに「何なにより一生しやうけん懸命けんめいやるといことが大だい事じです。すばらしかつたですね」と申もうし上あげました。

鎌倉かまくらの円覚寺えんがくじの管長かんちやう・横田南嶺上人よこたなんれいじやうにんは

生涯しょうがい独身どくしんを貫つらぬき、現在げんざい六十歳ろくじゅうさいくらいにな  
られます。若わかくして管長かんちやうになられ、本ほんを  
何冊なんさつも書かいておられますし、すばらしい  
お話はなしをされる方かたです。その横田よこた上人じやうにんが  
「母はははありがたいです。どこに行いつても  
話はなしを聞きいてくださった方かたから『管長かんちやう猊下しか、  
ありがたいご法話ほうわでした』とほめてもら  
えますが、母ははには必かならず『またいい加減かげんな  
ことを言いつてからに』と言いわれてしま  
います。でもこれがいいのです。みながみ  
なほめてくださると慢心まんしんしてしまいます。  
しかし母ははは、茶化ちやかすように言いうのです。  
それが実じつはありがたいのです」とおつし

やいました。お母かあさまが横田よこた上人じやうにんを初心しよしん  
にもどしてくださるのかもしれない。  
岐阜ぎふ支院しえんの前主ぜんしゆ管かん・丹羽にわ上人じやうにんから聞き  
たお話はなしです。昔むかし、鈴木すずき慈学じがく上人じやうにんはお元氣げんき  
な頃ころ、講日こうびのたびに岐阜ぎふに赴おもむかれていま  
した。現在げんざいは月つきに一度いちど夜の講日こうびがありま  
すが、以前いぜんはお昼ひるだけでした。ある時とき、  
一人ひとりの信者しんじやさんが「たまには夜の法座ほうざも  
やっていただけませんか」と言いわれるの  
で、丹羽にわ上人じやうにんが慈学じがく上人じやうにんに相談そうだんをしたと  
ころ「昼ひるに来て、そのまま夜よるまでいてや  
ればいいから」と夜の法座ほうざもされるよう  
になりました。しかし、夜よるはあまり人ひとが

集まらなくてだんだん減へっていき、とう

とう、一人ひとりになってしまいました。そこ

で丹羽上人にわしやうにんが慈学上人じがくしやうにんに「今日は信者しんじやさ

んはお一人ひとりだけですが、どうされますか」

と聞きくと「やるよ」と言いわれ、お勤つとめの

後あと一対たい一ひとでご法話ほうわをされたそうです。講こう

日の後あと、丹羽上人にわしやうにんが「次回じかいもし一人ひとりも来こ

られなかつたらどうしましうか」と聞き

かれると、「柱はしらに向むかつてご法話ほうわをすれ

ばいい」と言いわれたそうです。慈学上人じがくしやうにん

には、うまく話はなそうとか、人ひとから良よく思おも

われないというような気持きもちちが一切さいな無なく、

ただ法華経ほけきやうを正ただしく、一生しやうけんめい懸命けんめいに説とくと

いう心こころのみだったのです。

慈学上人じがくしやうにんの言いわれたことを実際じつさいにやら

れた方がかたいます。中国ちゆうごくの竺道生じくしやうしやうというお

坊ぼうさんです。法華経ほけきやう・法師品ほっしほんには「若もし

説法せつぽうの人ひと、獨空閑どくくうげんの處ちよに在あって、寂莫じやくまくと

して人ひとの聲こゑなからんに、此こゝの經典きやうでんを讀誦どくしゆ

せば、我爾われその時ときに爲ために、清淨光明しやうじやうこうみやうの身みを

現げんぜん」とあります。説法せつぽうをする人ひとが、

誰だれも何なにもないところところで法ほうを説といていたら、

私わたくしが清淨光明しやうじやうこうみやうの身みをそこに現あわす」とお釈

迦かさまはおっしゃるのです。また「若もし

人空閑ひとくうげんにあらば、我天われてん・龍王りやうおう、夜叉やしや・鬼き

神等を遣わして、為に聽法の衆となさん」ともあります。誰もいないところで話をしている、必ず聴いている人がいる。またそのようにする」とお釈迦さまはおっしゃるのです。竺道生はこれを証明したのです。

道正は、四世紀の半ばから五世紀の初めに活躍した人です。この人は幼少時に出家して、十五歳の時すでに法座に昇っていたといひます。四十歳くらいの時、妙法蓮華經を翻訳した鳩摩羅什三歳が首都・長安に入りました。それを聞いてすぐに駆けつけ、弟子入りしました。する

とたちまち羅什門下四傑の一人と言われるようになったのです。

鳩摩羅什は法華經を翻訳しましたが、道生はその注釈書を書きました。最古の注釈書で「法華經義疏」と呼ばれています。また五時八教につながる「教相判釈」によって、お釈迦さま一代の教えを「善淨法輪」「方便法輪」「眞實法輪」「無余法輪」とに分けて説明しています。「善淨法輪」は在家信者のために説かれた教え。「方便法輪」は声聞・縁覺・菩薩のために説かれた教え。「眞實法輪」は法華經。「無余法輪」は涅槃經です。

涅槃經ねはんぎょうに關しては前半部分の「大般泥洹經おんぎょう」だけが道生の時代に伝わっていたのですが、実はその中に、正法を誹謗するような悪い人わるひと（闍提せんたい）は絶対に成仏じやぶつできないとありました。ですから当時の人は、正法の悪口わるぐちを言うような人は絶対に成仏できないと信じていました。それに対して道生は「それは仏さまの真意ではない。仏さまは一闍提までもすべてを成仏させるといふ考かえの方だからそれは違ちがう。この涅槃經には続きがあるはずだ」と反論はんろんしました。そのため追放され、蘇州そしゅうの山奥やまおくにある虎丘寺こきゅうじに隱棲いんせいを余儀よぎな

くされました。しかしひるむことなく「我が所説しよせつは、もし經義きやうぎに反はんすれば現身げんしんにおいて癘疾れいじつを表あらわさん。もし実相じつそうと違背いはいせずば、願ねがわくば壽終じゆじゆうの時とき、獅子ししの座ざに昇のほらん」と誓言せいごんし、以来いらいまい毎日まいにち、山川草木さんせんそうもくに向むかつて法華經ほけきやうと涅槃經ねはんぎやうを説とき、また闍提成仏せんたいじやぶつの義ぎを説くと、ある時とき、たくさんの石いしが首肯しゆこんしたと言いいます。喜んで飛び跳はねる石いしもあつたそうです。仏さまが「道生の言いうとおり、間違まちがいがない」と石いしを化身けしんとして教おしえを示しめされたのです。法師品ほつしほんに書かかれていますことが起おこつたのです。

そして何年かのち、涅槃経の後半部分が中国に伝わってきました。道生の言う通り「すべての人が成仏できる。一闍提も成仏できる」と書いてありました。すると、それまで道生の説に反していた人たちがその先見の明に感服したと言われています。

道生は晩年故郷の廬山に帰り、生涯を送りました。最後は誓った通り、廬山で法座に昇って、説法が終わると同時に眠

るように入滅したということです。

今、虎丘寺があった場所には虎丘公園があります。そこには、道生が法を説いた時に動いたという石「點頭石」が祀られています。點頭とは、うなずく、という意味です。道生の法を聞き、うなずいた石ということなのです。

いついかなる時も、真実を抱いて、一生懸命にやるのが尊いということなのです。